

人とのやりとりにおいて, 関東と関西とでは違いがあるのか : 自分のへマを他者に話す行動を通しての地域文化差の探索的検討

丹羽, 空
九州大学大学院人間環境学府

加藤, 和生
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/10275>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 8, pp.91-107, 2007-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :



人とのやりとりにおいて、関東と関西とでは 違いがあるのか

—自分のヘマを他者に話す行動を通しての地域文化差の探索的検討—

丹羽 空 九州大学大学院人間環境学府
加藤 和生¹⁾ 九州大学大学院人間環境学研究院

Exploratory Investigation of Regional Cultural Differences on Interpersonal Interactions —Comparing Blunder-Telling Behaviors between Kansai and Kanto people—

Sora Niwa (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)
Kazuo Kato (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

This study investigated regional cultural differences in Japan. Based upon the historical and economical backgrounds of *Kanto* and *Kansai*, we assumed that blunder-telling behavior would be a good index for revealing their differences in interpersonal interactions. 54 (Study 1) and 309 (Study 2) college students responded to a questionnaire. Study 1 showed, as expected, that *Kansai* people are more likely to tell their blunders than *Kanto* people. However, no significant regional difference was found in Study 2. We performed exploratory factor analyses on blunder items and found 2 types of blunders: Exaggerating- and reporting-type of blunders. The simple main effect for region was reached to marginal significance on exaggerating-type of blunders. Its implications and limitations were discussed.

Keywords: Regional culture, interpersonal interactions, culture and personality, cultural psychology

問題と目的

「文化とパーソナリティ」研究は1960年代まで活発におこなわれていた。この研究分野での目的は「社会的制度とパーソナリティ²⁾に関わる変数との相互関係」を検討することであり(Shweder, 1979), この目的のもとに、多くの興味深い研究が生まれた。例えば、国外では、Benedict (1946) は、面接と資料をもとに、アメリカ人とは異なり日本人の行動原理には恥意識があると論じた。Mead (1961) は、観察と面接を通じて、人類に普遍であるとそれまで思われていた性役割がサモアでは逆転し

ていることを指摘した。また、Whiting & Whiting (1975) は、観察と面接による文化比較を通して、幼児期に個人が接する社会的制度(具体的には養育者の養育態度)がその後のパーソナリティに大きく影響すると述べた。これらの「文化とパーソナリティ」研究は、人間の多様な側面が文化によって大きく規定されていることを示してきた。そして、これらの研究は社会科学の領域にも大きなインパクトを与えることとなった。

この「文化とパーソナリティ」研究の流れをくみ、日本国内では県民性の研究が発展した(丸井, 1966)。例えば、星野・祖父江・須江・今井(1958) は、東北地方のエジコ(幼児を入れる育児容器の1種)による養育文化が地域的パーソナリティに及ぼす影響についての研究を行った。また、村松(1961)を代表とする「日本人の文化とパーソナリティの実証研究」プロジェクトは、日本人の精神病理の背後にある文化的要因を検討した。他にも、農村・漁村・山村における各パーソナリティの特徴を記述することで、集団的パーソナリティの形成と地域文化の関係についての研究がおこなわれた(例えば、木本, 1961; 大宮, 1962; 中村, 1962)。このように、「文化とパーソナリティ」研究は、国間の比較に留まらず、国内の地域文化に関する研究にまで発展していった。だが、1960年代に入ると、次の3つの理由から「文化

¹⁾本研究を行うにあたり丸野俊一先生、吉村宰先生、丸野研究室に所属の皆さまに有益な示唆を頂いた。質問紙調査の実施にあたっては、池田幸代先生、岩宮真一郎先生、架場久和先生、橋彌和秀先生、堀雅美先生、中島祥好先生、藤村まこと氏、丸山千秋先生、村山航氏、山ノ内裕子先生に格別の配慮を頂いた。また、論文作成にあたっては、富田英司氏、野上俊一氏、小林美緒氏、小田部貴子氏に貴重なコメントを頂いた。本論文は以上の方々のご尽力無くしては為し得なかった。あらためてここに深い感謝の意を表す次第である。なお、本研究に関するお問い合わせは、以下のメールアドレスにご連絡ください: son866@hotmail.com

²⁾この人類学的な研究の流れで「パーソナリティ」とは、ある文化や地域の人に共通する行動パターン(様式)を意味していたと考えられる。よって、心理学で用いられる「パーソナリティ」とは異なる。

とパーソナリティ」研究は衰退していった。第1は、イデオロギーの問題である(Nisbett & Cohen, 1996, pp.xvi)。当時は、人間間の差を示すことが差別につながると見なされる社会的傾向があった。そのため、人間の集団間の差異を示すことは、むしろ回避される傾向にあった。第2に、メタ理論的な問題が挙げられる(Nisbett & Cohen, 1996, pp.xvi)。「文化とパーソナリティ」研究では、各文化の特徴や文化間の差異が研究ごとに示されたが、それらの各研究を体系的に説明する理論化の試みがなされなかった。そのため、「文化とパーソナリティ」の名のもとになされた諸研究が1つの理論的に統合されたものとして発展することが困難であった。第3に、方法論的な問題が挙げられる。「文化とパーソナリティ」研究は、個人の論述や見解の記述的段階にとどまるもので、科学的測定法による把握はなされてこなかった。実際、この点に関して箕浦(1984)や丸井(1966)は、このような文化差が本当にあると主張するためには、歴史的資料や伝承に基づく、あるいは観察や面接による主観的記述だけでなく、厳密な科学的測定法によっても実証される必要があると指摘している。「文化とパーソナリティ」研究の数が減少した背後には、以上の理由があると考えられる。

だがNisbettら(1996)は、次に挙げる理由から、現在では既にそうした問題自体がほとんど問題ではなくなっていると主張している。第1に、人類の共通性を重視してきたそれまでの社会的風潮は個人差・集団差あるいは文化差を重要視するようにならってきた(pp.xvi)。集団間の差が尊重され、その差の意味を考えようとする研究者が増えてきた。また、第2のメタ理論的な問題に対しては、Nisbettらは進化論をもとに、文化差の説明を試みることを提案している(pp.xvii)。もちろん、進化論が文化の問題に応用できるか否かは、現在のところ明らかではない。しかし、彼らは文化に関する個別の知見を体系的に整理・説明するためには、進化論は有効である可能性があるとして主張しているのである。第3の方法論的問題に関しては、次のように述べている。「心理学では、人間の心を捉える構成概念を測定するためのさまざま

な測定法がすでに開発されてきている。したがって、このような方法を用いることで、文化差を客観的に測定することができる(Nisbett, 1996, pp.xvii)」というのである。すなわち、心理学的方法を用いることで、これまでの主観的な記述による「文化とパーソナリティ」研究に実証的な裏づけを提供することができると主張している。

以上を踏まえてNisbettらは、上述の重要な問題を扱う「文化とパーソナリティ」研究の復興を提唱している。彼らはその1つの実証的研究例として、アメリカ南部には「侮辱に対して暴力的にふるまうことで自分とその家族を守ろうとする」というその土地特有の「誇り文化」があることをさまざまな心理学的方法(質問紙・実験・フィールド実験)を用いながら実証した(e.g., Cohen & Nisbett, 1994; 1996; 1997; Cohen, Nisbett, Bowdle, & Schwarz, 1996; Nisbett, 1993)。すなわち、自分たちの「誇り」が侵されるような場合には、アメリカ南部人は他の地域の人に比べて攻撃的気質をより示すという現象(「誇り文化」)を実証的に検討したのである。Nisbettらは、この南部特有の攻撃的気質が南部人の過去の経済形態である牧畜文化から形成されたと考えている。すなわち、南部には丘陵地帯からの移民が多く、彼らの祖先はその土地で牧畜をおこなっていた。こういった牧畜民は、家畜泥棒を未然に防ぐために侮辱に対して攻撃的にふるまう必要があったという。というのは、侮辱を許すことで、他者から軽んじられ、その結果、家畜泥棒に「目をつけられて」彼らの被害に遭う可能性が高くなるからである。さらにNisbettらは、近代化によって直接的な経済的理由がなくなった場合であっても、こうした認知や行動様式は一旦文化としてその地域に住む人々の中に定着されたなら、それ自体が自律化し保たれ続けることは可能であるとしている³⁾。このことから、過去の経済形態において必要であった行動や認知は現代にまでも引き継がれようと主張している。

以上の一連の実証的研究を踏まえてNisbettらは、今こそ、心理学的方法を用いることによって、「文化とパーソナリティ」研究で扱われた重要な問題を再度検討する必要があると主張している(Nisbett & Cohen, 1996)。だが、このような提言に続く研究は、アメリカでも日本でも今のところほとんど見当たらない。

そこで、本研究は、Nisbettらの主張にもとづき、日本国内の地域文化差について探索的に検討することを試みた。具体的には、過去の経済形態が異なるとされる関東人と関西人の人とのやりとりとそれに関わる心理的構成概念の違いがあるか否かについて検討する。

関東と関西における経済形態と人とのやりとり

本研究は「現在の地域文化差が、過去の経済形態の違いに由来する」というNisbettの主張にならうものであ

³⁾その論拠として、Nisbettら(1996)は、「機能的自律性(functional autonomy, Allport, 1937)」と「多数の無知(pluralistic ignorance, Allport, 1924)」を挙げている(p.92)。機能的自律性とは、「その行為の当初の目的を失った時でも、他の側面で機能している限り、その行為は行われている現象」を指す。また、多数の無知とは、「集団の成員は互いに自分の公的行為が自分の感情や信念と一致していないと考えているが、他者の公的行為はその人の感情や信念と一致していると推測する現象」を指す。この現象を「誇り文化」の例にあてはめると次のようになる。すなわち、多くの南部人が侮辱に対して攻撃的に振る舞うことが重要であるとはすでに考えていないかもしれない。しかし、「他者はこの行動様式をまだ重視している」と信じているために、結局、その行動様式が集団の中で共有され続けるといえるのである。

る。そこで、関東と関西の過去の経済形態にどのような違いがあったかについて、以下に記述する。

歴史学者（例えば網野，1998；宮本，1966；1969）によれば、江戸時代に、関東は武士が、また関西は商人が、特徴的な経済形態をそれぞれ発展させていた。すなわち、武士は武力や権力を背景に人民を支配するという経済形態を発展させた。このような経済形態では、人民からの反発や抵抗を防ぐために、他者から尊敬されることが必要になってくるだろう。それゆえ、武士にとって「自分の面子を維持」することは重要であったと考えられる。

一方、関西を中心に栄えた商人は、物品の販売を通して利益を得るという経済形態を発展させた。このような経済形態では、顧客や取引相手との交渉を成功させ、より多くの良好な対人関係を構築していくことが必要になってくるだろう。それゆえ、商人にとって「良好な対人関係を構築」することは重要であったと考えられる。

もし先に言及した Nisbett らの主張のように「過去の経済形態が形成した行動様式や認知が、現代にまで引き継がれうる」とするならば、現在でも関東は体面維持を、関西では関係構築をそれぞれ重視して、人とのやりとりをおこなっていると予想される⁴⁾。

自分のヘマを他者に話すこと（「ヘマ話行動」）

ではこういった関東人と関西人が示す人とのやりとりの違いを明らかにするには、どのような行動を分析したらよいのだろうか。その1つの候補に「自分のヘマを他者に話すこと（ヘマ話行動）」が考えられる。というのは、ヘマ話行動には関係構築には有効に作用するが、体面維持には不利に働いてしまうと推察できるからである。ヘマを話すことによって他者と笑い合い、その場が楽しいものになる。その場が楽しいものになれば、相手の緊張や自分に対する警戒心が緩和して、相手との関係が構築しやすくなると考えられる。それゆえ、ヘマ話行動とは、他者との良好な関係を構築する上で有効に働くやりとりの道具と考えられよう。だが、ヘマ話行動は体面維持に対してネガティブな効果をもたらす可能性もある。というのは、ヘマを話すことによって、自分のネガティブな情報を相手に知らせてしまう。相手にわざわざ自分のネガティブな情報を知らせて恥をさらすのであれば、自分の体面を失うことにもなりかねない。それゆえ、ヘマ話行動とは、体面を維持する上で不利に作用するやりとりの道具とも考えられる。例えば、「学校で筆箱を取

りだしたら、テレビのリモコンを間違えて持ってきていた」という例を考えてみよう。このようなヘマ話を他者にした場合、やりとりをしている他者は笑ってくれるだろう。そして、その場が楽しいものになり、他者と良好な関係を構築しやすくなるだろうと考えられる。だが同時に、「こいつはバカじゃないか」といった自分についてのネガティブな印象を他者に持たせてしまう可能性も生じる。もし他者がそのような印象を持った場合、ヘマを話すことで、自分の恥をわざわざさらしていることになる。

ヘマ話行動にこのような相反する2つの効果があるとすれば、関西人と関東人では、「ヘマ話行動」、「それに関わる心理的要因」、そして「それらの心理的要因のヘマ話行動に対する影響の仕方」にどのような違いがあると予想できるであろうか。すなわち、関係構築を重視する関西人と体面維持を重視する関東人とは、ヘマ話行動に対する感じ方や思考がどのように異なるのだろうか。

これまで述べてきたことに基づいて予想するならば、次のように考えることができよう。すなわち、もし関東人が体面維持を重要とするのであれば、関東人は自分がヘマをしたというようなネガティブな情報を他者に話そうとしないだろう。むしろ、そのようなヘマを話すかどうかを決める際に、関東人はまず話すことによって自分が恥をどれだけ感じるかについて予想すると考えられる（「恥予想」）⁵⁾。そして、この恥予想が高ければ高いほど、関東人はヘマをより話さないだろうと考えられる。すなわち、関東人はヘマを話さない傾向があり、彼らのヘマ話行動は恥予想という心理的要因によって抑制されているためだと予測することができる。

このような関東人に対して、もし関西人が関係構築を重視する人とのやりとりを行うのであれば、関西人は自分のヘマを積極的に他者に話そうとするだろう。関西人がヘマを話すかどうかを決める際に、関東人と同様に恥予想をするであろう。そして、この恥予想が高ければ高いほど、関西人もヘマを話さないだろうと考えられる。だが、関西人は関係構築を重視するという仮定に基づくならば、彼らは話した相手がどれだけ笑ってくれるかについても予想するだろう（「ウケ予想」）。そして、このウケ予想が高ければ高いほど、彼らがヘマを話す可能性はより高くなるだろう。これらのことから、関西人は、自分のヘマを積極的に話し、関西人のヘマ話行動は恥予想によって抑制されるだけでなく、ウケ予想によって促進もされるだろうと予測することができる。

以上のことをまとめると、本研究の目的は、次のようになる。すなわち、本研究では、人とのやりとりにおける国内地域文化差を探索的に検討するために、特に「自分のヘマを他者に話す」という行動における関東人と関

⁴⁾なお、これまでも実証的な分析手法に基づくものではないが、多くの人たちが人とのやりとりの様式における関東人と関西人との対比を行ってきている。その中で特に典型的と考えられるものを Appendix 1 にまとめた。

⁵⁾ここでいう恥とは、「他者には知られたくない自分の劣等な部分を他者に知られた時に生じる感情（作田，1967）」を指す。

西人との比較を行う。また、本研究では、心理的に媒介する要因のうち、特にウケ予想と恥予想に焦点をあて、これらの心理的要因がヘマ話行動に対してどのように影響しているのかについての地域文化差も検討する。以上を本研究の目的とし、具体的には次の2つの仮説を立てた。

仮説1：関西人は、関東人に比べて、自分のヘマを他者により頻繁に話すだろう。

仮説2：ヘマ話行動に関わる心理的要因の影響の仕方には、地域文化差が見られるだろう。具体的には、関東人のヘマ話行動は恥予想による抑制的影響を受けるだろう。それに対して、関西人のヘマ話行動は恥予想による抑制的影響も受けるが、ウケ予想による促進的影響も受けるだろう。そしてまさにこのウケ予想の影響の仕方にこそ、関東人と関西人の違いが表れるだろう。

研究 1

方法

ヘマ話項目の作成 本研究では「ヘマ」を次のように定義した：「自分の間違えが原因で、日常生活の中でちょっとした失敗をすること。ただし、その失敗は他人に不便を感じさせない程度の比較的軽度なもの」。具体的な例は、上述した「学校で筆箱を取りだしたら、テレビのリモコンを間違えて持ってきていた」などである。比較的軽度な失敗の程度であることを定義に入れた理由は、どのような失敗の程度のヘマ話においても地域差が見出されるわけではないと予想するからである。というのは、人を笑わせるために重度な失敗の程度の話（例えば、「デパートでの万引きが見つかってしまい、警察に通報され学校から停学処分をうけてしまった」という話）をした場合、「笑いごとでは済まない話を笑い話にしようとする」という自己についてのネガティブな印象を相手に与えてしまい、自分に対する相手の信頼を失う可能性がある。この場合、やりとりの緊張感が緩和されるとは考えにくい。また逆に、自分に対する相手の警戒心を高めてしまうこともあるだろう。これらのことは、関係構築に対して不利に作用するだろうと考えられる。このことから、関西人の場合でも、人を笑わせるために失敗の程度が重度である話はしないだろうと予想される。したがって、失敗の程度が軽度である場合にのみ地域文化差が見られるだろうと予想した。ただし、どんな失敗をヘマと捉えるか（「ヘマ認知」）が地域によって異なる可能性がある。そこで、この可能性がないことを確認するために、失敗の程度が異なる2種類の「ヘマ話項目」を次の手順で作成した。

まず、「自分の間違えが原因である」ことが明確に表

現された20個のヘマ話項目を作成した。そのうちの16個は、「失敗の程度が他人に不便を感じさせない比較的軽度なもの」という本研究でのヘマの定義に従うものであった。残りの4個は、本研究のヘマの定義にはあてはまらない「失敗の程度が比較的重度で他人に不便を感じさせるもの」を作成した（例：デパートでの万引きが見つかってしまい、警察に通報され学校から停学処分をうけてしまった）。

以上の手続きに基づいて作成した各ヘマ話の文章を、ヘマの内容が十分にイメージできる範囲で1文にまとめた。次に、質問紙に20個のヘマ話項目をランダムに配列した。

質問紙の構成 質問紙は大きく次の3部から構成された。

(a) フェイスシート 個人情報に関する次の3点について回答を求めた：①性別、②年齢、③「誕生から現在までに在住した地域」と「その在住期間」。なお、③については過去から順に回答するよう求めた。

(b) ヘマ認知 「どんな失敗をヘマと捉えるか」というヘマ認知に関しては、著者らの知る限り地域文化差があるか否かについて今のところ明らかにされていない。そこで本研究ではまず、調査で使用するヘマ話項目が地域の別に関わらずヘマとして（あるいはヘマでないものとして）認知されているか否かを確認しておく必要がある。そこで、準備した20個のヘマ話項目のそれぞれについて、次の問に基づき評定させた：「あなたの持っている『ヘマ』のイメージにどのくらいよくあてはまりますか。」という問いを用いた。その際、7件尺度（「(1)まったくあてはまらない」～「(7)非常によくあてはまる」）を用いた。

(c) 本調査に関する調査項目 上述の20個のヘマ話項目について、次の3つの側面に関する評定を求めた。

①ヘマ話行動：各項目について、次の問に基づき評定させた：「もしあなたが次のようなヘマ（あるいはそれに似たようなヘマ）をしてしまったとしたら、友だちを笑わせるために、あなたならそのことをどのくらい話したいと思いますか」。その際、7件尺度（「(1)絶対に話したくない」～「(7)非常に話したい」）を用いた。

②ウケ予想：各項目について、次の問に基づき評定させた：「もしそれを友だちに話したとしたら、どのくらい笑ってくれる（ウケる）だろうと思いますか」。その際、7件尺度（「(1)絶対に笑ってくれない」～「(7)絶対に笑ってくれる」）を用いた。

③恥予想：各項目について、次の問に基づき評定させた：「あなただったら、それを友だちに話すことをどのくらい恥ずかしいと思いますか」。その際、7件尺度（「(1)まったく恥ずかしくない」～「(7)非常に恥ずかしい」）を用いた。

調査回答者 質問紙への回答者は、大学生・大学院生13名であった。なお、回答者は、東京都・神奈川県・大阪府および福岡県に在住の者であった。これらの回答者の中から、次の2段階の手続きを踏まえて、本研究の最終的な分析対象者を選出した。第1段階では、回答者の「出身地」を「9歳から15歳までの6年間に継続して在住していた地域」と操作的定義をした。第2段階では、第1段階で定義された出身地が関東あるいは関西である者を本研究の最終的な分析対象者とした。

なお、第1段階の操作的定義の根拠は、箕浦(2003)の「9歳から15歳までが人ととのやりとりに対する文化的な影響を強く受ける時期である」という研究知見に基づいている。第2の基準は、広辞苑(新村, 1998)の定義を参考にした。広辞苑によると、関東とは茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川を、関西(近畿)とは滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山を指す。

よってフェイスシートでこれらの地域に9歳から15歳までの6年間に継続して在住したと回答した54名を最終分析対象者とした。その内訳は、関東出身者28名(男性15名, 女性13名, *Mean* 年齢=21.86, *SD*=1.48), 関西出身者26名(男性14名, 女性12名, *Mean* 年齢=20.96, *SD*=.92)であった。

実施手続き 質問紙は各地域の研究協力者を通じて回答者に個別に手渡しで配布した。配布する際に、回答者は約1週間後に回答済みの質問紙を研究協力者に提出するように求められた。

回答所要時間は、約15~20分であった。ディブリーフィングは、データを収集してから約1ヶ月後に、研究協力者を通じて行った。具体的には、著者が研究協力者を通して研究の目的と結果について記述した用紙を回答者に配布した。

調査時期 2004年9月~11月の間に実施した。

結果と考察

以下で行った分散分析は、すべて2(地域: 関東, 関西) × 2(性別)の2要因分散分析であった。

ヘマ認知 ヘマ認知に地域文化差がないことを確認するために、20個のヘマ話項目のヘマ認知得点について分散分析を行った。その結果、ヘマ話項目の20個全てにおいて地域の有意差は見られなかった(Table 1の地域の

項の列を参照)。なお、例外として項目18において、有意な交互作用が見られた($F_{(1, 50)}=6.92, p<.05$)。下位検定を行ったところ、男性における地域の単純主効果が見られた($F_{(1, 50)}=4.58, p<.05$)。ヘマ認知得点において、関東の男性($M=2.47$)は、関西の男性($M=3.93$)に比べてより高いことを示していた。このことは、ヘマ認知において男性では地域文化差があったが女性ではなかったことを示している。また、関東における性別の単純主効果も有意となった($F_{(1, 50)}=11.67, p<.01$)。ヘマ認知得点において関東では女性($M=4.85$)が、男性に比べてより高いことを示していた。このことは、ヘマ認知について関東では性差があったが、関西ではなかったことを示している。

なお、本研究では性別は主要な関心事ではないので、それらの結果は本文中からは省略し、脚注に示す⁶⁾。同様に、その後の分析でも性別の結果は脚注に示すことにする。

以上の結果から、どのような失敗体験をヘマとして認知するかについて地域文化的な違いがあるとは言えない。すなわち、地域によって異なったヘマの認知があるとは言えないことが考えられる。

そこで更に、ヘマ認知の高さを保証するために、以下の分析ではヘマ認知得点の平均が4.0以上であった16個のヘマ話項目を合成した得点に基づいて行うことにした。これら16項目はヘマ話項目を作成する際に本研究のヘマの定義と合致するように作成した項目であった。このことは、ヘマの定義に合致するように作成した項目を回答者らはヘマ話として認知していることを示している。

分析に用いた3つの得点(つまり、ヘマ話行動, ウケ予想, 恥予想)についても、上述の16個のヘマ話項目の内的整合性を確認するために、それぞれの α 係数を算出した。その結果、ヘマ話行動, ウケ予想, 恥予想の順に α 係数は.85, .88, .94(関東), .87, .80, .96(関西)であった。このことから、各変数の内的整合性は十分に高いことが確認できたと言える。したがって、16個のヘマ話項目の評定値をそれぞれ合成したヘマ話行動得点, ウケ予想得点, 恥予想得点について以下の分析を行った。**ヘマ話行動** 上記のヘマ話行動得点について分散分析を行った(Table 2参照)。その結果、予想どおり、地域の主効果の傾向が認められた($F_{(1, 50)}=3.95, p=.052$)。ヘマ話行動得点において、関西人($M=4.87$)は、関東人($M=4.38$)に比べて、より高かった。このことから、関西人は関東人に比べてヘマをより頻繁に話していると考えられる。なお、交互作用は有意ではなかった($F_{(1, 50)}=1.46, n.s.$)⁷⁾。

以上の結果から、関西人は、関東人に比べて、自分のヘマを他者により頻繁に話すと言えよう。すなわち、関東と関西の間では、人とのやりとりパターン、特に「自分

⁶⁾性別については、有意な主効果が項目番号2・5・18の3例において見いだされた(Table 1の上から順に $F_{(1, 50)}=8.04, p<.01$; $F_{(1, 50)}=6.89, p<.05$; $F_{(1, 50)}=4.45, p<.05$)。いずれの項目においても女性が男性よりも高い平均値を示している。この主効果は、女性が、男性に比べて、提示されたヘマ話項目について自分のヘマのイメージにより合致していると考えていることを示す。

⁷⁾性別の主効果は有意でなかった($F_{(1, 50)}=.01, n.s.$)。

Table 1-1
Cognition Blunders for All Items as a Function of Region and Sex

1. Blunder Items	Kanto		Kansai		Main Effects		Interaction	
	<i>n</i>	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>n</i>	<i>M</i> (<i>SD</i>)	Region <i>F</i> (<i>p</i>)	Sex <i>F</i> (<i>p</i>)	<i>F</i> (<i>p</i>)	<i>F</i> (<i>p</i>)
1. After class, I stopped the teacher on the way to her office by mistakenly calling her "Mom!". 廊下で、間違えて先生を「お母さん」と呼びとめてしまった。								
Female	13	5.08 (1.44)	12	4.92 (1.83)	.49 (.49)	1.15 (.29)	.14 (.71)	
Male	15	4.73 (1.87)	14	4.21 (1.93)				
Total	28	4.89 (1.66)	26	4.54 (1.88)				
2. In the morning while I was half asleep, I made a cup of coffee. After one sip, I realized that I had put salt in it, instead of sugar. 寝ぼけたままコーヒーを入れたら、砂糖と塩を入れ間違えて、飲んでからそれに気がついた。								
Female	13	6.08 (1.19)	12	5.42 (1.83)	.06 (.81)	8.04 (.01)	2.24 (.14)	
Male	15	3.80 (2.11)	14	4.71 (2.30)				
Total	28	4.86 (2.07)	26	5.04 (2.09)				
3. The night before, I drank alcohol too much. The next morning, I found myself lying on a stranger's door step. 酒を飲みすぎてしまい、気がついたら知らない人の家の前で寝てしまっていた。								
Female	13	4.46 (2.26)	12	4.83 (1.75)	.27 (.61)	.03 (.86)	.03 (.85)	
Male	15	4.47 (1.88)	14	4.64 (1.86)				
Total	28	4.46 (2.03)	26	4.73 (1.78)				
4. I did not notice that my favorite jacket had been inside-out all day, even though I was proudly wearing it. 自分のお気に入りの服を気分良く着ていたが、気がついたら裏表逆さまだった。								
Female	13	6.08 (.76)	12	5.17 (2.21)	.24 (.63)	2.17 (.15)	2.50 (.12)	
Male	15	4.73 (1.71)	14	5.21 (1.48)				
Total	28	5.36 (1.50)	26	5.19 (1.81)				
5. I fell asleep, while I was in class; when I got up, I saw a big drool stain on my textbook. 講義中にいねむりをしてしまい、気がついたら、よだれで教科書に大きなシミを作ってしまった。								
Female	13	5.15 (1.57)	12	4.58 (1.83)	.13 (.72)	6.89 (.01)	2.18 (.15)	
Male	15	3.07 (2.34)	14	4.00 (1.52)				
Total	28	4.04 (2.25)	26	4.27 (1.66)				
6. I was so distracted by checking my celi phone that I crashed my bike right into the power pole. よそ見をしながら (例えば、携帯でメールをしながら) 自転車をこいでいて、電柱に思いっきりぶつかってしまった。								
Female	13	5.69 (1.32)	12	4.92 (1.62)	.78 (.38)	.05 (.82)	.84 (.36)	
Male	15	5.20 (1.61)	14	5.21 (1.72)				
Total	28	5.43 (1.48)	26	5.08 (1.65)				
7. I went into what I thought was my apartment, saying "I'm home!", but actually I was on the wrong floor and it was a stranger's apartment. アパートの階をまちがえて、自宅だと思って入ったら全く知らない人が座っていた。								
Female	13	5.62 (1.45)	12	4.92 (2.02)	.92 (.34)	.16 (.69)	.18 (.67)	
Male	15	5.20 (1.82)	14	4.93 (2.06)				
Total	28	5.39 (1.64)	26	4.92 (2.00)				

Table 1-2
Cognition Blunders for All Items as a Function of Region and Sex (Continued)

1. Blunder Items	Kanto			Kansai			Main Effects					
	<i>n</i>	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>n</i>	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	Region		Sex		Interaction	
							<i>F</i>	(<i>p</i>)	<i>F</i>	(<i>p</i>)	<i>F</i>	(<i>p</i>)
8. When I called my friend's house, I talked to her sister for a while, mistakenly thinking that I was talking to my friend. 友だちの家に電話したところ、友だちとまちがえて友だちの兄弟姉妹にしばらく話してしまった。												
Female	13	5.77	(1.17)	12	4.83	(1.75)	1.83	(.18)	.33	(.57)	.39	(.53)
Male	15	5.20	(1.78)	14	4.86	(2.07)						
Total	28	5.46	(1.53)	26	4.85	(1.89)						
9. I accidentally slipped and fell down the stairs at the train station, in front of a crowd of people who saw me fall. うっかり駅の階段を踏みはずして、おおぜいの人の前でころげおちてしまった。												
Female	13	5.31	(1.75)	12	4.33	(1.87)	1.42	(.24)	.00	(.95)	.75	(.39)
Male	15	4.87	(1.92)	14	4.71	(1.33)						
Total	28	5.07	(1.82)	26	4.54	(1.58)						
10. My teacher asked me to speak up in class. Because I was very nervous, I started speaking in a strange voice. 講義であてられて、それに答えようとしたら、緊張のあまり声が裏返ってしまった。												
Female	13	4.46	(2.03)	12	3.42	(2.19)	.04	(.84)	.02	(.89)	2.98	(.09)
Male	15	3.60	(1.96)	14	4.43	(1.79)						
Total	28	4.00	(2.00)	26	3.96	(2.01)						
11. Because I thought that she was my friend, I waved at and stopped a total stranger. 友だちだと思って手を振りながら呼び止めたら、まったく知らない人だった。												
Female	13	5.54	(1.45)	12	4.75	(2.09)	2.29	(.14)	.05	(.82)	.00	(.98)
Male	15	5.67	(1.91)	14	4.86	(2.18)						
Total	28	5.61	(1.69)	26	4.81	(2.10)						
12. When changing my clothing after swimming, I realized that I did not bring my underwear, and left the house with my swimsuit under my clothes. 水着を下に着てでかけて、泳いだあとに着替えようと思ったら、替えの下着を忘れていた。												
Female	13	5.54	(1.56)	12	5.25	(2.14)	.06	(.80)	1.05	(.31)	.66	(.42)
Male	15	4.60	(1.88)	14	5.14	(1.88)						
Total	28	5.04	(1.77)	26	5.19	(1.96)						
13. I came home happily, because I thought I looked good with my new jeans, but then I found that my zipper was open. 買ったばかりのズボンを1日格好よくはきこなせたと思いながら帰宅したら、チャックが開いたままだった。												
Female	13	5.77	(1.24)	12	5.33	(2.31)	.73	(.40)	.67	(.42)	3.12	(.08)
Male	15	4.53	(1.96)	14	5.79	(1.31)						
Total	28	5.11	(1.75)	26	5.58	(1.81)						
14. While reaching the climax of the movie in a quiet theatre, my stomach rumbled. 静まり返った映画館の中で、しかも感動的な映画の場面で、おなかの音が大きく鳴ってしまった。												
Female	13	5.23	(1.30)	12	3.83	(2.21)	1.52	(.22)	1.69	(.20)	2.20	(.14)
Male	15	3.80	(2.11)	14	3.93	(1.77)						
Total	28	4.46	(1.90)	26	3.88	(1.95)						

Table 1-3
Cognition Blunders for All Items as a Function of Region and Sex (Continued)

1. Blunder Items	Kanto			Kansai			Main Effects		Interaction
	<i>n</i>	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>n</i>	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	Region <i>F</i> (<i>p</i>)	Sex <i>F</i> (<i>p</i>)	<i>F</i> (<i>p</i>)
15. I got to school and opened my backpack to take out my pencil case; to my surprise, I found a TV remote controller there instead. 学校で筆箱を取りだしたら、テレビのリモコンをまちがえて持ってきていた。									
Female	13	5.92	(1.38)	12	5.17	(1.90)	.02 (.88)	3.58 (.06)	1.46 (.23)
Male	15	4.20	(2.51)	14	4.79	(2.08)			
Total	28	5.00	(2.21)	26	4.96	(1.97)			
16. I gave a sigh of relief because I was able to rush onto the departing train, but I was unable to move because of my shirt getting stuck in the door. 電車に勢いよくかけこんで、なんとか乗れたと一息ついたら、服がドアにはさまって動けなくなっていた。									
Female	13	5.00	(1.22)	12	4.67	(2.23)	.02 (.89)	.08 (.77)	.73 (.40)
Male	15	4.47	(1.77)	14	4.93	(1.49)			
Total	28	4.71	(1.54)	26	4.81	(1.83)			
2. Non Blunder Items	<i>n</i>	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>n</i>	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>F</i> (<i>p</i>)	<i>F</i> (<i>p</i>)	<i>F</i> (<i>p</i>)
17. I studied really hard for the entrance exam, but I overslept on the very day of the exam and I had to take it again the next year. 受験に向けて猛勉強したが、当日の朝に寝坊してしまい、1年浪人することになってしまった。									
Female	13	3.46	(2.54)	12	3.33	(2.42)	.24 (.63)	.00 (.99)	.46 (.50)
Male	15	3.00	(2.42)	14	3.79	(2.46)			
Total	28	3.21	(2.44)	26	3.58	(2.40)			
18. I was so hungry that I ate food even though it was expired; as a result, I got an upset stomach the next day. あまりの空腹にたえきれず、賞味期限がすぎたものまで食べてしまい、結局おなかをこわしてしまった。									
Female	13	4.85	(1.95)	12	3.67	(1.72)	.08 (.78)	4.45 (.04)	6.92 (.01)
Male	15	2.47	(1.73)	14	3.93	(1.94)			
Total	28	3.57	(2.17)	26	3.81	(1.81)			
19. I was caught shoplifting by the police, who notified my school, and I was expelled. デパートでの万引きが見つかってしまい、警察に通報され学校から停学処分をうけてしまった。									
Female	13	2.54	(2.57)	12	2.42	(2.23)	.12 (.73)	.00 (.96)	.02 (.88)
Male	15	2.67	(2.23)	14	2.36	(2.02)			
Total	28	2.61	(2.35)	26	2.38	(2.08)			
20. I unthinkingly revealed my friend's secret; she ended our friendship. 友だちの秘密をうっかりもらしてしまい、その友だちから絶交されてしまった。									
Female	13	3.08	(2.78)	12	2.67	(2.39)	.05 (.82)	.28 (.60)	.15 (.70)
Male	15	2.47	(2.33)	14	2.57	(2.21)			
Total	28	2.75	(2.52)	26	2.62	(2.25)			

Note. "Blunder Items" are whose means were greater than 4.0 on Cognition Blunders, whereas "Non Blunder Items" are to be the ones less than 4.0.

Table 2
Means and SDs of Blunder-Telling Behaviors in Each Region and Sex

Study 1						
	<i>Kanto</i>			<i>Kansai</i>		
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>(SD)</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>(SD)</i>
Female	13	4.20	(.80)	12	5.02	(1.18)
Male	15	4.54	(.92)	14	4.74	(.85)

Study 2						
Types of Blunders						
1. Total (16 Items)						
Female	66	5.17	(1.06)	69	5.15	(1.10)
Male	119	4.43	(1.25)	53	4.84	(1.29)
2. Exaggerating (5 Items)						
Female	66	5.35	(1.39)	69	5.42	(1.22)
Male	119	4.85	(1.48)	53	5.35	(1.43)
3. Reporting (4 Items)						
Female	66	4.46	(1.43)	69	4.21	(1.60)
Male	119	3.71	(1.55)	53	3.88	(1.72)

のヘマ話を他者に話す」という点において違いがあると言える。

ヘマ話行動に関わる心理的要因 ヘマ話行動に関わる心理的要因が地域によって異なるか否かを検討するために、ヘマ話行動得点を目的変数に、ウケ予想得点と恥予想得点を説明変数とした重回帰分析を地域別に行った。その結果、予想した通り、関東と関西とでは心理的要因が異なったパターンでヘマ話行動に関わっていることが示された（地域別単純相関表は Table 3 を参照）。関東人モデルでは、恥予想得点のみがヘマ話行動得点を負の方向に予測していた（ $\beta = -.50$, $R^2 = .24$ ）。それに対して、関西人モデルでは、関東人と同様に恥予想得点によってヘマ話行動得点は負の方向に予測されていた（ $\beta = -.62$ ）が、ウケ予想得点によってヘマ話行動得点は正の方向に予測されていた（ $\beta = .54$, $R^2 = .54$ ）。

以上の結果から、ヘマ話行動に関わるだろうと理論的に予測した心理的要因の回帰パターンに地域文化差が示された。すなわち、関東人は「自分のヘマを相手に話した時にどのくらい恥ずかしく感じるか」を予想し、そのような予想をすればするほど、話さないことが示された。それに対して、関西人は、この恥予想だけではなく、相手が笑ってくれるかどうかという予想（ウケ予想）によっても、話すかどうかを決めていることが示された。すなわち関西人は、相手が笑うだろうと予想すればするほど、

ヘマをより話すことを示している。

本研究の問題点 研究1の方法上の問題点として次の2つが挙げられる。第1は「話したいと思うか」という教示は、話すことに対する欲求を尋ねる表現であり、「自分のヘマを他者に話すという行動に移すかどうか」について問うているかは明確でなかった。例えば、仮に人が自分のヘマを他者に話したいと強く思っていたとしても、その人は自分の社会的役割や他者からの期待のために、ヘマを実際には話さない場合が考えられる。本研究のねらいは話したいという欲求ではなく、ヘマを話すかという認知レベルの行動にある。そこで、研究2では、自分のヘマを実際に話すか否かについて問うていることがより明確になった表現に修正する必要がある。

第2の問題点は、予想に反して、地域の主効果が傾向を示すにとどまったことにある。その原因としては次の2つがある。1つは、被験者数が十分でなかった可能性がある。もう1つの原因に、用いたヘマ話項目が地域文化差を明らかにするためには適切ではなかったことが考えられる。では、どのようなヘマ話項目が地域文化差をより明確に示すのだろうか。研究1の結果から、関西人のヘマ話行動得点はウケ予想得点と正の相関関係にあったが、関東人のヘマ話行動得点はウケ予想得点と有意な相関関係になかったことが示されている。すなわち、ウケ予想得点のより高いヘマ話項目を使用することによっ

Table 3
Correlations among Blunder-Telling Behaviors, Expectation of Laughing,
and Expectation of Embarrassement in Each Region

Study 1		1.		2.	
<i>Kanto</i> (<i>n</i> =28)		<i>r</i>	(<i>p</i>)	<i>r</i>	(<i>p</i>)
	1. Blunder-Telling Behaviors				
	2. Expectation of Laughing	.22	(.25)		
	3. Expectation of Embarrassement	-.47	(.01)	.11	(.59)
<hr/>					
<i>Kansai</i> (<i>n</i> =26)					
	1. Blunder-Telling Behaviors				
	2. Expectation of Laughing	.45	(.02)		
	3. Expectation of Embarrassement	-.54	(.00)	.15	(.47)
<hr/>					
Study 2		Total			
		1.		2.	
<i>Kanto</i> (<i>n</i> =183-185)		<i>r</i>	(<i>p</i>)	<i>r</i>	(<i>p</i>)
	1. Blunder-Telling Behaviors				
	2. Expectation of Laughing	.44	(.00)		
	3. Expectation of Embarrassement	-.36	(.00)	-.03	(.70)
<hr/>					
<i>Kansai</i> (<i>n</i> =122-124)					
	1. Blunder-Telling Behaviors				
	2. Expectation of Laughing	.33	(.00)		
	3. Expectation of Embarrassement	-.43	(.00)	-.02	(.85)
<hr/>					
		Exaggerating			
		1.		2.	
<i>Kanto</i> (<i>n</i> =183-185)		<i>r</i>	(<i>p</i>)	<i>r</i>	(<i>p</i>)
	1. Blunder-Telling Behaviors				
	2. Expectation of Laughing	.46	(.00)		
	3. Expectation of Embarrassement	-.43	(.00)	-.06	(.42)
<hr/>					
<i>Kansai</i> (<i>n</i> =122-124)					
	1. Blunder-Telling Behaviors				
	2. Expectation of Laughing	.39	(.00)		
	3. Expectation of Embarrassement	-.59	(.00)	-.17	(.05)
<hr/>					
		Reporting			
		1.		2.	
<i>Kanto</i> (<i>n</i> =183-185)		<i>r</i>	(<i>p</i>)	<i>r</i>	(<i>p</i>)
	1. Blunder-Telling Behaviors				
	2. Expectation of Laughing	.39	(.00)		
	3. Expectation of Embarrassement	-.34	(.00)	-.03	(.65)
<hr/>					
<i>Kansai</i> (<i>n</i> =122-124)					
	1. Blunder-Telling Behaviors				
	2. Expectation of Laughing	.27	(.00)		
	3. Expectation of Embarrassement	-.43	(.00)	.08	(.37)

て関東人のヘマ話行動得点は変わらないが関西人のヘマ話行動得点はより高くなり、その結果、ヘマ話行動得点における地域文化差が出やすくなると考えられる。そこで、研究2では、地域文化差をより明確に示すために、ウケ予想得点のより高いヘマ話項目を精選する必要があると考えられる。

研究 2

研究2の目的は、研究1で示された地域文化差の一般性を検討することであった。その際、次の修正を加えた。第1に、被験者数を増やした。第2に、質問紙に次の2つの改善点を加えた。1つは、教示の表現を変更した。研究1で使用した「話したいと思うか」という教示の表現では、欲求について尋ねている可能性がある。そこで、自分のヘマを他者に話すことを行動に移しているかについて尋ねていることがより明確になるような表現に修正した。すなわち、「話すと思うか」という表現に変えた。2つ目は、ウケ予想得点のより高いヘマ話項目を用いた。

方法

ヘマ話項目の作成 ヘマ話行動の地域文化差をより取り出しやすくするために、研究1で使用したヘマ話項目のうちウケ予想得点のもっとも低かったヘマ話項目の4個を削除し、それらの代わりにウケ予想得点のより高くなるような新たな4個のヘマ話項目を作成した⁸⁾。これらの項目は、研究1と同様に、次の基準を満たすように作成した。すなわち、①「自分の間違えが原因である」ことが明確に表現されていること、②ヘマの内容が「失敗の程度が比較的軽度で他人に不便を感じさせないもの」というヘマの定義に基づくもの、であった。ヘマ話項目は、全部で16個あり、それらはランダムに配列された。**質問紙の構成** 質問紙は大きく次の2部から構成された。(a) フェイスシート 研究1と同じであった。

(b) 本調査に関する調査項目 研究1と同様に16個のヘマ話項目について次の3側面について評定を求めた。

①ヘマ話行動：教示の表現を「話したいか」ではなく「話すと思うか」という行動に移すか否かを尋ねていることが明確になるように変更した。すなわち、各ヘマ話項目について、次の間に基づき評定させた：「もしあなたが次のようなヘマ（あるいはそれに似たようなヘマ）

⁸⁾ $n=6$ の予備調査は、新たに作成したヘマ話項目のウケ予想得点は、削除されたヘマ話項目のウケ予想得点に比べて高かった。

⁹⁾ 性別の主効果は、研究1とは異なり、有意となった ($F_{(1,303)}=13.98, p<.01$)。ヘマ話行動得点において、女性 ($M=5.16, SD=1.07$) は、男性 ($M=4.55, SD=1.28$) に比べて、有意に高かった。このことは、女性は男性に比べてヘマをより頻繁に話していることを示していると考えられる。

をしてしまったとしたら、あなたならそのことをどのくらい話すと思いますか。」その際、7件尺度（「(1)絶対に話さない」～「(7)絶対に話す」）を用いた。

②ウケ予想・③恥予想：研究1と同様の教示と評定法を用いた。

調査回答者 質問紙への回答者は、東京都・大阪府に在住の大学生419名（男性220名、女性199名）であった。最終的な分析対象者は、研究1と同様の基準に基づき、これらの回答者からさらに選出された。すなわち、①関東あるいは関西に②9歳から15歳までの6年間に継続して在住していた者を本研究の最終的な分析対象者とした。

分析対象者は、関東出身者が185名（うち男性119名、女性66名、*Mean* 年齢=19.21, *SD*=.98）、関西出身者が124名（うち男性55名、女性69名、*Mean* 年齢=20.04, *SD*=1.12）であった。

実施手続き 研究協力者に依頼して、講義時間を使用して、講義受講者を対象にクラスで一斉に質問紙を実施してもらった。回答所要時間は、約20～30分であった。デブリーフィングは研究1と同様であった。

調査時期 2005年4月～7月の間に実施した。

ウケ予想の操作チェック 研究2で新たに作成した4個のヘマ話項目のウケ予想得点 ($M=5.23, SD=1.19$) は、削除した4個のヘマ話項目のウケ予想得点 ($M=4.56, SD=.99$) に比べて、有意に高かった ($t(359)=3.92, p<.01$)。このことは、意図したようにヘマ話項目の操作ができていたことを示す。

結果と考察

16個のヘマ話項目についてのヘマ話行動・ウケ予想・恥予想の各内的整合性を確認するために、それぞれの α 係数を算出した。その結果、ヘマ話行動、ウケ予想、恥予想の順に α 係数は.91, .85, .93（関東）、.91, .86, .94（関西）であった。このことから、各変数の内的整合性は十分に高いことが確認できたとと言える。したがって、16個のヘマ話項目についての評定値をそれぞれ合成したヘマ話行動得点、ウケ予想得点、恥予想得点について以下の分析を行った。

1. **ヘマ話行動：①全ヘマ話項目** 上記のヘマ話行動得点について、2（地域：関東、関西）×2（性別）の2要因分散分析を行った。その結果、予測に反して、地域の主効果は有意ではなかった ($F_{(1,303)}=1.91, n.s.$)。また、交互作用も有意ではなかった ($F_{(1,303)}=2.23, n.s.$)⁹⁾。地域と性別ごとのヘマ話行動得点の平均値と*SD*はTable 2に示した。

②ヘマ話項目の探索的因子分析 16個のヘマ話項目のヘマ話行動得点を合成して分析した場合には、地域文化差は見出されなかった。だが、これらのヘマ話項目をさら

Table 4
Exploratory Factor Analysis for Blunder-Telling Behaviors ($n=306, R^2=47.48$)

F1: Exaggerating-Type of Blunders ($\alpha = .80$)	F1	F2
1. (7) I went into what I thought was my apartment, saying "I'm home!", but actually I was on the wrong floor and it was a stranger's apartment.	.75	-.03
2. (1) Because I did not notice the cactus on the chair, I promptly sat down on it and got a thorn in my ass.	.72	-.02
3. (15) I got to school and opened my backpack to take out my pencil case; to my surprise, I found a TV remote controller there instead.	.62	.06
4. (12) While I was casually playing with the lighter, the flame grew suprisingly big and burned my eyebrows.	.61	.13
5. (3) The night before, I drank alcohol too much. The next morning, I found myself lying on a stranger's door step.	.57	-.02
F2: Reporting-Type of Blunders ($\alpha = .79$)	F1	F2
6. (4) I did not notice that my favorite jacket had been inside-out all day, even though I was proudly wearing it.	-.08	.79
7. (5) I fell asleep, while I was in class; when I got up, I saw a big drool stain on my textbook.	-.04	.73
8. (13) I came home happily, because I thought I looked good with my new jeans, but then I found that my zipper was open.	.19	.59
9. (14) When I was quarreling with my friend, I accidently called him "stardust", instead of "bastard", because I was overly excited.	.16	.54
Correlations between Factors		.71

Note. Numbers in parenthesis indicate the order presented in a questionnaire.

に細かく分類し、分析することで、地域文化差が見出せるのではないかと考えた。もし関西人が関係構築を重視するならば、関西人は自分のヘマを他者に話す場合、相手により楽しんで笑ってもらいたいだろうと予想される。「ヘマが起こった通り報告されている」といった「報告型」のヘマ話（例：自分のお気に入りの服を気分良く着ていたが、気がついたら裏表逆さまだった）である場合、相手を笑わせることは難しいだろう。であるとすると、関西人は、このタイプのヘマをそれほど積極的に他者に話さないだろうと考えられる。だが、「誇張型」のヘマ話（例：アパートの階をまちがえて、自宅だと思って「ただいま」と言いながら入っていったら全く知らない人が座っていた）である場合には、相手をより笑わせることができるだろうと考えられる。であるとするとならば、関西人はこのタイプのヘマをより頻繁に話す予想される。一方、もし関東人は面子維持を重視するならば、

相手を笑わせられるかどうかは彼らにとって重要ではない。したがって、ヘマの内容が報告型であれ誇張型であれ、それが関東人のヘマ話行動に影響するとは考えにくい。

以上のことから、16個のヘマ話項目のうち、ヘマ内容が誇張あるいは脚色されている項目については、関東と関西の地域文化差が認められるかもしれないことが考えられる。だが、ヘマ内容が報告型の項目であれば、地域文化差は認められないだろう。この可能性を探索的に検討するために、次のような再分析を行った。まず、16個のヘマ話項目のヘマ話行動得点について探索的因子分析を行った。次に、各因子に高い負荷量を示したヘマ話項目をそれぞれ合成した得点を算出した。最後に、上記の合成したヘマ話行動得点について、この得点を被験者内要因として加えた3要因分散分析を行った。

具体的な因子分析の手続きは次の通りである。すなわ

ち、両地域のデータを合わせたヘマ話行動得点について、プロマックス回転による重み付けのない最小2乗法を用いた因子分析を行った。3つの観点（固有値の推移、共通性.16以上、因子負荷量.50以上）から因子数の決定や項目の選択を行った結果、2因子解（9項目）が適当であると判断した（Table 4）。第1因子は、「(項目1)アパートの階をまちがえて、自宅だと思って『ただいまー』と言いながら入っていったら全く知らない人が座っていた」や「(項目2)サボテンに気がつかず、その上に勢いよく座ってしまい、トゲがお尻にくいこんだ」などの5項目に高い因子負荷を示した。これらの項目は実際にあったヘマよりも話が誇張されていたりあるいは脚色が加えられていたりする可能性が高いと考えられる。このことから、これら5項目を「誇張型ヘマ話」（ $\alpha=.80$ ）と命名した（ここでの「誇張」という言葉には、「脚色」の意味も含む）。第2因子は、「(項目6)自分のお気に入りの服を気分良く着ていたが、気がついたら裏表逆さまだった」や「(項目7)講義中にいねむりをしてしまい、気がついたら、よだれで教科書に大きなシミを作ってしまった」などの4項目に高い因子負荷を示していた。これらは、「どんなヘマを実際にしたか」というありのままの事実にもとづいて正確に報告している内容であると考えられる。このことから、これら4項目を「報告型ヘマ話」（ $\alpha=.79$ ）と命名した。各因子の内的整合性は十分に高かったので、各因子に高い負荷量を示した項目をそれぞれ合成して2つの変数（誇張ヘマ話と報告ヘマ話）を作成した。

③3要因分散分析 ヘマ内容によってヘマ話行動の地域文化差のあらわれ方が異なるか否かを検討するために、合成したヘマ話行動得点について、ヘマ内容（誇張型ヘマ話、報告型ヘマ話）を要因として加えた3要因混合分散分析を行った。なお、ヘマ内容は被験者内要因であった。地域と性別とヘマ内容ごとのヘマ話行動得点の平均値とSDはTable 2に示した。分散分析の結果、先の分析結果と同じで、有意な地域の主効果は認められなかった（ $F_{(1,303)}=.62, n.s.$ ）。

だが、ヘマ内容と地域の1次の交互作用に有意が見られた（ $F_{(1,303)}=4.20, p<.05$ ）。そこで、ヘマ内容ごとに地域文化の単純主効果の検定を行ったところ、予想どおり、報告型ヘマ話は地域の単純主効果は有意ではなかった（ $F_{(1,303)}=.04, n.s.$ ）。だが、誇張型ヘマ話において地域文化差の傾向がみとめられた（ $F_{(1,303)}=2.95, p=.08$ ）。すな

わち、誇張型ヘマ話のヘマ話行動得点において、関西人（ $M=5.39, SD=1.31$ ）は、関東人（ $M=5.03, SD=1.46$ ）に比べて、高い傾向を示した。このことから、ヘマ内容が誇張・脚色されている場合、関西人は関東人に比べてヘマをより頻繁に話している可能性があると考えられる。また、地域ごとのヘマ話行動得点について、ヘマ内容の単純主効果を検定した。その結果、いずれの地域においても誇張型ヘマ話が報告型ヘマ話よりも、ヘマ話行動得点において有意に高いことが示された（関東： $F_{(1,184)}=112.28, p<.01$ 、関西： $F_{(1,121)}=131.04, p<.01$ ）。この結果は、関東人も関西人も誇張しているヘマ内容の方を、報告的なヘマ内容に比べて、より頻繁に話すことを示している。なお、2次の交互作用は有意ではなかった（ $F_{(1,303)}<.01, n.s.$ ）¹⁰⁾。

研究2の目的は、被験者の数を増やすことにより、研究1で示された地域文化差の一般性を確認することであった。だが、「関西人のヘマ話行動得点は、関東人に比べて、有意に高い」という研究1の結果は追試されなかった。すなわち、ヘマ話行動得点における地域の有意差は見られなかった。

そこで、ヘマの内容を分けて更に詳細に分析したところ、地域文化差のあらわれ方はヘマ内容によって異なることが示された。すなわち、ヘマ内容が誇張されている場合には、地域文化差が見出されることが分かった。これは、関西人が関係構築を重視しており、やりとりの相手を楽しませるために、実際にあったヘマをただ報告するのではなく、事実「尾ヒレ」をつけていることと解釈できよう。実際、誇張型ヘマ話の合成したウケ予想得点（ $M=5.14, SD=1.07$ ）は、報告型ヘマ話の合成したウケ予想得点（ $M=4.48, SD=1.19$ ）に比べて、有意に高かった（ $t_{(306)}=10.86, p<.01$ ）。

2. ヘマ話行動に関わる心理的要因：①全ヘマ話項目
ヘマ話行動に関わる心理的要因の地域文化差を検討するために、16個のヘマ話項目の評定値を合成したヘマ話行動得点を目的変数に、同様に16個のヘマ話項目について合成したウケ予想得点と恥予想得点を説明変数とした重回帰分析を地域別に行った（地域別単純相関はTable 3を参照）。その結果、関西人モデルでは、研究1の結果が追試された。すなわち、恥予想得点はヘマ話行動得点を負の方向に予測するだけでなく（ $\beta=-.42$ ）、ウケ予想得点もヘマ話行動得点を正の方向に予測していた（ $\beta=.32, R^2=.27$ ）。だが、関東人モデルは、予想に反して、関西人モデルと同様となり、恥予想得点はヘマ話行動得点を負の方向に予測するだけでなく（ $\beta=-.35$ ）、ウケ予想得点もヘマ話行動得点を正の方向に予測していた（ $\beta=.44, R^2=.31$ ）。

②誇張ヘマ話項目 地域の単純主効果が傾向を示した誇張ヘマ話について、上と同様の重回帰分析を地域別に行っ

¹⁰⁾性別とヘマの内容の主効果はそれぞれ有意であった（性別： $F_{(1,303)}=6.70, p<.01$ 、ヘマの内容： $F_{(1,303)}=223.53, p<.01$ ）。女性（ $M=4.86, SD=1.28$ ）は、男性（ $M=4.38, SD=1.37$ ）に比べて、ヘマ話行動得点有意に高かった。また、誇張型ヘマ話（ $M=5.17, SD=1.41$ ）は、報告型ヘマ話（ $M=4.01, SD=1.59$ ）に比べて、ヘマ話行動得点有意に高かった。

た。具体的な分析は、次の通りであった。すなわち、ヘマ話行動における再分析と同様に、5個の誇張型ヘマ話項目についてのヘマ話行動・ウケ予想・恥予想の内的整合性があるか否かを確認するために、それぞれの α 係数を地域別に算出した。その結果、誇張型ヘマ話項目のヘマ話行動・ウケ予想・恥予想の順に α 係数は、.80, .65, .83 (関東), .79, .58, .86 (関西)であった。したがって、これら5個の誇張ヘマ話項目の評定値を合成したヘマ話行動得点、ウケ予想得点、恥予想得点について以下の分析を行った。

上記の3つの変数に基づいて重回帰分析を地域別に行った。だが、その結果、ヘマ話行動に関わる心理的要因の地域文化差は示されなかった。すなわち、関西人モデルでは、恥予想得点はヘマ話行動得点を負の方向に予測しており ($\beta = -.54$)、ウケ予想得点はヘマ話行動得点を正の方向に予測していた ($\beta = .30, R^2 = .43$)。関東人モデルにおいても同様に、恥予想得点はヘマ話行動得点を負の方向に予測しており ($\beta = -.40$)、ウケ予想得点はヘマ話行動得点を正の方向に予測していた ($\beta = .44, R^2 = .37$) (地域別単純相関は Table 3 を参照)。

以上のヘマ話行動に関わる心理的要因についての結果をまとめると、次のようになる。すなわち、研究2では、ヘマ内容に関わらず、ヘマ話行動に関わる心理的要因についての地域文化差は示されなかった。この結果は次のことを示している。すなわち、地域の別に関わらず、人は話すことが恥ずかしいと予想すればするほどヘマを話さないが、相手が笑ってくれると予想すればするほど、ヘマを話すことを意味している。

総合考察

結果のまとめ 本研究では、人とのやりとりにおける国内地域文化差を探索的に検討するために、「自分のヘマを他者に話す」という行動についての関東と関西の比較を行った。具体的には、関係構築を重視する関西人は、体面維持を重視する関東人に比べて、自分のヘマをより頻繁に話すだろうという仮説を検討した。その結果、研究1では、ヘマの内容が何であれ、地域文化差が示された。だが、研究2では必ずしも同様の結果は得られなかった。そこで、さらに詳細な分析を行った結果、誇張・脚色のあるヘマの内容であれば、関西人は、関東人に比べて、自分のヘマをより頻繁に話す傾向にあることが明らかになった。これは、関西人は関係構築を重視するために、そのための有効な笑いを積極的に取り入れた人とのやりとりを行っている可能性を示唆するものと解釈できよう。関西人は「自分が他者からどう見えるか」や「事実はどうだったか」といったことよりも、その場の盛り上がりや他者との関係を構築することに積極的であるこ

とが、ここから読み取れよう。それに対して、関東人はヘマを話すかもしれないが、彼らにとってのヘマ話とは「こういう事実があったのだ」という報告にすぎない可能性が考えられる。

本研究の限界点 ヘマ話行動における地域文化の効果は、予想に反してそれほど大きくはなかった。この結果について、以下の2つの原因が考えられる。第1の原因として、今回の質問紙では、ヘマ話に対する期待や思い入れといった態度における関東人と関西人の地域文化差が十分に測定できていなかったことが挙げられる。関東人も現在では我々が予想する以上にヘマを話しているのかもしれない。だが、それは現在のメディアによる一時的な影響であるかもしれない。というのは、現在、全国的に「お笑いブーム」があるといわれており、関東人もお笑い芸人と彼らの人気にメディアを通して影響されている可能性が高い。したがって、体面を重視すると仮定された関東人も現在では一時的にヘマを話しているのかもしれない。しかし、これはあくまで流行に影響された結果である可能性が高く、ヘマ話 (あるいはより広義には「笑い」) は関東人にそれほど深く根付いていないものと考えられる。それに対して、関西人は長い歴史の中で関係を構築していく上で有効な笑いを重視し続けてきたと考えられる。この考えに基づけば、関西人は人を笑わせることについて非常に高い価値を持っており「どうやったら人を笑わせることができるか」について常に意識しているのではないだろうかと推察できる。このような関西人にとってヘマ話をするとは単なる一時的な流行によるものではない。それは「人を笑わせるための重要な道具」であると考えられる。したがって、関西人はヘマを話すことの効果 (すなわち人を笑わせられること) に対して非常に期待しており、それゆえヘマ話に対して特別な思い入れを持っているのではないかと考えられる。

地域文化の効果がそれほど大きくなかった第2の理由として、質問紙で使用したヘマ話項目では、笑いが十分に喚起できなかった可能性が挙げられる。質問紙ではヘマ話内容を簡潔な1文にまとめざるをえなかった。そのため、ヘマ話の「おかしさ (hilarious)」を十分に表現できなかったと考えられる。関西人である吉村 (2005, 私信) によれば、関西人は笑いに非常に高い価値を置き、笑いに対して「厳しい目」を持っているという。彼らは自分自身の「笑いのレベル」の高さを自負しており、質問紙で提示した程度のヘマ話ではおかしさが彼らにとって十分ではないために、ヘマ話行動にそれほど高くない評定値を示したのではないかとやっている。今回の質問紙の中に、例えば「サボテンに気がつかず、その上に勢いよく座ってしまい、トゲがお尻にくいこんだ」というヘマ話項目があった。先述した吉村の指摘に基づけば、これは関西人が「こんなネタでは笑いがとれない」と判

断したためであろう。同様に、関西人の小林(2006, 私信)によれば、上記の例話に次のような情報が加えられなければ「笑いのレベル」は十分でないと言っている。すなわち、「あまりの痛みに下着まで脱いで四つんばいで尻を突き出してもだえていたら、ベランダ越しに近所のおばさんと目があった」といったより笑いを喚起させる情報である。しかし、今回の質問紙では紙面に限りがあり、このような情報をすべてのヘマ話項目に加えることは困難といわざるをえない。したがって、今後はこのようなおかしさを高めた上でヘマ話項目を作成しなおす必要があると考えられる。

今後の展望 本研究の結果から、次の3つの今後の展開が考えられる。第1は、「笑い好き」、「笑いに対する鋭敏さ」など、関係を構築していく上で有効な笑いに関する関西人に特徴的な心理的“特性”を今後より深く検討していく必要があるだろう。すなわち、吉村(2005, 私信)が指摘するような「関西人の笑いに対する要求水準の高さ」に見られるように、関西では笑いに対して非常に特徴的な心理的側面を持っている。また、小林(2006, 私信)によれば、関西では「ボケとツッコミ」という笑いを中心とした人とのやりとりパターンや役割の取り方が日常的に用いられているということである。すなわち、「ボケとツッコミ」とは、一方が日常の期待から外れた行動をとり(ボケ)、もう一方がその行動を指摘する(ツッコミ)という人とのやりとりの1パターンであると言えよう。関西では一方がボケた場合、やりとりの相手はそのボケに対して何かしらの反応(ツッコミ)を返すことが期待されている。ボケ役がせっかくボケたにも関わらず、相手がツッコミを返さないことを関西では「ボケ殺し」(小林2006, 私信)と呼ぶことがある。このように、関西には笑いに関して独特な表現が存在している。今後は、このような例に示される関西地域の特有の笑いに関する心理的“特性”を検討していく必要があるだろう。

第2の展開として、ヘマ話をした「話し手」についての「聞き手」の印象に注目する研究が考えられる。本研究は人とのやりとりの話し手に焦点をあてた研究であった。だが、人とのやりとりは話し手と聞き手の両方があることで成立するものであろう。したがって、話し手が意図したとおりにヘマ話の聞き手が実際に笑っているか否か、話し手に対する警戒心を緩和したか否か、話し手に関する聞き手の印象はどうだったかといったことについて検討する必要があるだろう。また、以上の点を確認した上で、本研究が想定したとおりに、ヘマ話が人とのやりとりを活発にして対人関係構築のための有効なやりとりの道具として役割を果たしているか否かについても検討していく必要があるだろう。

第3に、自己呈示の観点から人とのやりとりにおける

関東と関西の地域文化差を検討することである。本研究では、関東人は自分の面子維持を、関西人は関係構築を重視すると仮定した。このような仮定に基づいて考えると、彼らが日常的に行っている自分に対する相手の印象操作について詳細に検討することで、関東人と関西人の人とのやりとりの違いがより明らかに見出せるのかもしれない。自分に対する相手の印象を操作するという点で、自己呈示の観点から人とのやりとりにおける地域文化差を今後は検証していく必要があるだろう。

最後に 本研究は、Nisbettら(1996)が提唱している「文化とパーソナリティ」研究の再興の流れを受け、日本における地域文化差を心理学的手法を用いて検討しようとしたものである。その結果、2つの研究を通してヘマを他者に話すことについての関東人と関西人の違いについて一貫した結果は必ずしも示されたとは言えない。だが、「人とのやりとりにおける日本国内の地域文化差が存在するのではないか」という可能性を示唆するものであったと言えるだろう。この点において、本研究は日本国内の地域文化に関する研究、ひいては「文化とパーソナリティ」研究の実証的な裏付けを試みた研究であると言えよう。このような研究は、欧米でも始まったばかりである。このような研究が今後ますます増えることが期待されよう。

引用文献

- Allport, F. H. (1924). *Social Psychology*. Boston: Houghton Mifflin.
- Allport, G. W. (1937). *Personality: A psychological interpretation*. London: Constable and Company.
- 網野義彦 (1998). 東と西の語る日本の歴史 講談社
- Benedict, R. (1946). *The chrysanthemum and the sword: Patterns of Japanese culture*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- Chapman, A. J. (1976). Social aspects of humorous laughter. In Chapman A. J., & Foot, H. C. (Eds.). *Humor and laughter: Theory, research, and applications* (pp. 155-185). New Brunswick: John Wiley & Sons.
- Cohen, D., & Nisbett, R. E. (1997). Field experiments examining the culture of honor: The role of institutions in perpetuating norms about violence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **23**, 1188-1199.
- Cohen, D., Nisbett, R. E., Bowdle, B. F., & Schwarz, N. (1996). Insult, aggression, and the southern culture of honor: An “experimental ethnography.” *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 945-960.
- Cohen, D., & Nisbett, R. E. (1994). Self-protection and the culture of honor: Explaining Southern violence.

- Personality and Social Psychology Bulletin*, **20**, 551-567.
- Fraley, B. J. (2000). Humor as a mechanism for creating feelings of closeness between strangers. *Dissertation Abstracts International*, **61**(01), 587B. (UMI No. 9958701).
- 星野命・祖父江孝男・須江ひろ子・今井義量 (1958). 育児様式とパーソナリティ その1 ICU 教育研究 **5**, 148-216.
- 井上宏 (2003). 大阪の文化と笑い 関西大学出版部
- 岩中祥史 (2003). 出身県でわかる人の性格：県民性の研究 草思社
- 城戸幡太郎・築島謙三・島田一男 (1961). 生保内住民のパーソナリティ その(1) 第24回日本心理学会発表論文集, 447-448.
- 木本英人 (1961). 漁村住民のパーソナリティ形成についての1研究 第25回日本心理学会発表論文集, 1961, 447.
- 丸井文男 (1966). 文化とパーソナリティ：日本における10年間の業績概観 心理学評論, **10**, 199-228.
- Mead, M. (1961). *Coming of age in Samoa*. NY: Harper Collins Publishers.
- 箕浦康子 (1984). 文化とパーソナリティ論 (心理人類学) 綾部恒雄 (編) 文化人類学の15の理論 (pp.95-114) 中公新書
- 箕浦康子 (2003). 子供の異文化体験：人格形成過程の心理人類学的研究 新思索社
- 宮本又次 (1966). 関西と関東 青蛙房
- 宮本又次 (1969). 上方と坂東 青蛙房
- 村松常雄 編 (1961). 日本人—文化とパーソナリティの実証的研究 黎明書房
- 中村省吾 (1962). 漁村に於ける人格形成(2) —ソシオメトリー及び役割調査に現れた環境条件に就て— 第26回日本心理学会発表論文集, 1962, 275.
- 新村出 (編) (1998). 広辞苑 第5版 岩波書店
- Nisbett, R. E. (1993). Violence and U. S. regional culture. *American Psychologist*, **48**, 441-449.
- Nisbett, R. E., & Cohen, D. (1996). *Culture of honor: The psychology of violence in the South*. Boulder, CO: Westview Press.
- 大宮録郎 (1962). 山村住民のパーソナリティについての一研究 第26回日本心理学会発表論文集, 277.
- 作田啓一 (1967). 恥の文化再考 筑摩書房
- Shweder, R. A. (1979). Rethinking culture and personality theory part 1: Critical examination of two classical postulates. *Ethos*, **7**, 255-278.
- 祖父江孝男 (2000). 県民性の間学：出身県でわかる人柄の本 新潮社
- 武光誠 (2001). 県民性の日本地図 文藝春秋
- 武光誠 (2003). 大坂商人 筑摩書房
- Whiting, B. B., & Whiting, J. W. M. (1975). *Children of six cultures-A Psycho-cultural analysis*. Cambridge, MA: Harvard Press.
- 私 信
- 小林美緒 (2006, 10月1日。本論文へのコメント)
- 吉村宰 (2005, 8月20日。「認知と学習」研究会での本研究へのコメント)

Appendix 1
Contrasting Features of Kanto and Kansai People's Interpersonal Interactions

著者	関東	関西
祖父江(2000)	<ul style="list-style-type: none"> ● 体裁を気にする ● 気前のよさを誇示 ● 田舎者をばかにする 	<ul style="list-style-type: none"> ● 初対面の相手にもペラペラと話しかける人なつっこさがある ● あらゆる点で庶民的だしそれだけにしたたかでもある ● 腰が低い ● 反権威主義的 ● 集団の中で統制のとれた行動がなかなかできない ● 気取った態度や考え方を嫌う ● がっちりした組織のなかで歯車となって働くより個人あるいは小さい組織で働くのを好む ● 見栄や面子よりも実をとる合理主義
岩中(2003)	<ul style="list-style-type: none"> ● 見栄の張り合い ● 隣は何をする人ぞという状況に居心地の良さを感じる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 他人と快適に過ごしたいから笑いと本音で楽に生きる ● 見栄やたてまえを捨てた人づきあいをする ● 誰とでも仲良くなろうとする ● ひとたび時間を共有したからには誰からともなくその時間を楽しく愉快的ものにしようとする意識が自然に働く ● 他人と時間を共有するときは、つねに相手が楽しくしているか、不愉快な思いをしていないか、もしそうだとしたら、どうすれば愉快になってもらえるか、といったことに気をまわしている ● 格好をつけずに素直に気持ちを表現する
武光(2001)	<ul style="list-style-type: none"> ● 他人に干渉したり干渉されたりするのを嫌い、お互いに深入りしないつきあいを望む ● 相手の地位によって人間を評価しがち 	<ul style="list-style-type: none"> ● 肩書きや組織の名前よりも個人の能力や人柄を基準に人間を評価する ● がめつく自己主張がつよいが陽気で人あたりが良い
武光(2003)	<ul style="list-style-type: none"> ● 権力指向が強い 	<ul style="list-style-type: none"> ● 反体制的で自由を重んじる ● 権力よりの態度をとる者が軽蔑される